

ペアレンティングによる親子介入支援の 長期的効果検証とマニュアル作成

1. 研究の目的

(1) ペアレンティング理論の家庭における長期的実践とその効果の検証

①現在参加中で継続希望の被験者、および新規に募集し参加希望する被験者において、ペアレンティング効果を主観的・生理学的・心理学的・脳科学的に解析・検証することで、長期効果の実証を得る。

②新規参加家族と長期継続家族の比較検討や同一家族での経時的変化の検討

(2) 得られた結果をもとにした理論の体系化とペアレンティングマニュアルの提言

①この実践理論に基づいたペアレンティングマニュアルを社会に広く認知させることで、密室育児で不安を高めた親が虐待や過干渉、共依存などの不適切な育児に陥ってしまう事例を減少させ、適切な子どもの生育環境が担保され、より良い発達が促されることを目的とする。

②蓄積データと個々の事例検討による独自のマニュアル作成

2. 研究の計画

(1) ペアレンティング理論の家庭における長期的実践とその効果の検証

①家庭におけるペアレンティング（親などが子どもに与える生活・養育環境）の質が、遺伝素因以上に子どもの思春期以降の心身機能と行動・情緒に大きく影響するという科学的根拠をもとに、2017年8月より開始している親子介入支援を継続して行う。

②上記継続支援により2017年8月～2021年4月までに継続的に採取している子の発達障害関連評価、親子の生理学的評価、心理学的評価、及び脳科学的評価の測定結果の解析を行い、個人データの前後比較と、集団としての比較、また新規参加家族と長期継続家族の比較検討や同一家族での経時的変化の検討を行う。

(2) 得られた結果をもとにした理論の体系化とペアレンティングマニュアルの提言

①複数の学会での発表（小児心身医学会、日本心理学会などを予定）、および論文作成を予定。

②被験者集団からの蓄積データと個々の事例を詳細に検討し、独自のペアレンティングマニュアルの作成を目指す。

3. 研究の成果

(1) ペアレンティング理論の家庭における長期的実践とその効果の検証

①今年度は、2017年から2021年までペアレンティング指導を用いた親子介入支援を行い、生理学的・心理学的データを蓄積した家族のうち3組の自閉症スペクトラム子とその母について、母子両面からの効果解析を行った。この間に2018年～2019年の支援中断期間、および2020年初頭からのCOVID19パンデミックがあったため、その影響についても検討した。その結果、親子関係検査においては、母が「随順」「溺愛」をはじめとする複数項目が経時的・平均的に改善したのに対し、子は一定の改善傾向を見ることができず、思春期の主観的な反抗心などの影響が示唆された(図1)。この傾向は、中断やCOVID19パンデミックに影響を受けていなかった。一方、子のS-HTP描画法による評価得点(図2)は支援期間に改善し、支援中断やCOVID19パンデミックにより悪化する傾向がみられ、これは母の特性不安得点(図3)と同じ傾向であった。介入支援の存在は母の不安を軽減し、それにより子の認知特性の変容を促す可能性が示唆された。

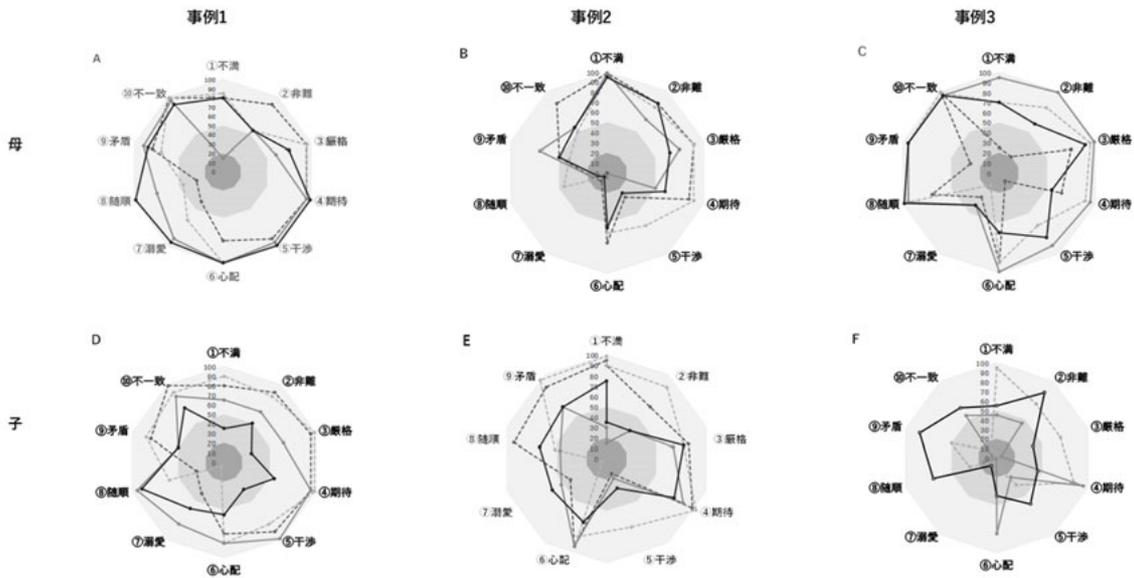


図1：母子 TK 式診断的新親子関係検査の経時変化研究期間中に採取した TK 式診断的新親子関係検査各項目のパーセント値を円グラフで表す。A:事例1母、B:事例2母、C:事例3母、D:事例1子、E:事例2子、F:事例3子の結果であり、それぞれ 2017年8月、2018年8月、2019年8月、2020年4月の結果を示す。なお、事例3子は2017年8月時点で質問紙の適応年齢に達していなかったためデータ採取はできなかった。
 安全域 中間域 危険域

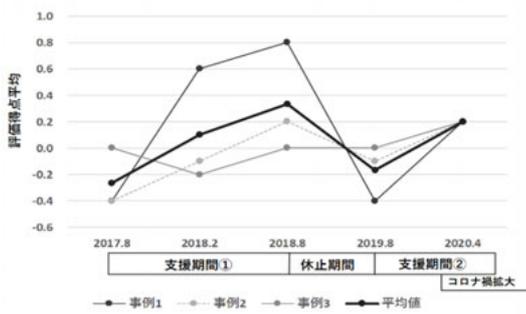


図2：子統合型HTP描画評価得点平均値の経時変化
 子3事例の各描画を評価基準表を用いて採点し平均点をプロットして経時変化を示した。さらに3事例の平均点もグラフ内に示した。

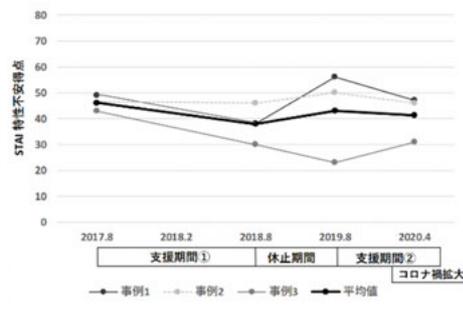


図3：母特性不安得点の経時変化
 母3事例のSTAI不安尺度から採点した特性不安得点の経時変化を示した。さらに3事例の平均点もグラフ内に示した。

②上記①の結果を2021年度小児心身医学会にて口頭発表(優秀推薦演題に選ばれる)した。現在、得られた膨大なデータを引き続き分析しており、今後は、それぞれのパラメーターの関連性についても解析していく。

(2) 得られた結果をもとにした理論の体系化とペアレンティングマニュアルの提言

- ①2020年度当初は複数の学会や大会での発表・招待講演を予定していたが、COVID19感染拡大の影響により多くが中止延期など変更となり、計画通り遂行できなかった。
- ②多くの得られた蓄積データから獲得した親子介入支援の実際を、ワーク形式にまとめたうえで、親子支援マニュアルとして文章に起こす作業を行った。現在、出版社が入り、原稿推敲作業を行っている状態である。

4. 研究の反省・考察

(1) 考察

①親子介入支援を継続することで、全体として親子関係は親子双方とも段階的に改善し、長期効果があることが考察された。親子相互作用も存在した。親子関係は支援中断やパンデミックに大きくは左右されなかったが、子が思春期に入ったことによる主観的な親評価

の低下がみられた。

②一方で、親の不安と子の投映的描画評価の変化は、一致して介入支援で改善している傾向がみられた。子の主観が入りにくいという点で、描画法は意義があると考えられた。

これらのことより、継続的なペアレンティング・トレーニングを用いた介入支援を親子同時に行うことは、特に自閉症スペクトラム等発達障害のある児の養育家庭において、良好なペアレンティングの維持に有効であることが示唆された。

(2) 反省

①COVID19パンデミックにより対面でのデータ採取が大きく制限されたため、後半は質問紙を被験者自宅に郵送して記入、返送する形をとった。そのためデータの不正確性が考えられることと、脳機能測定等の採取ができなかった。

②小児被験者からの協力が得られず、欠損値となるデータが散見されるため、データ数が統計学的検討に値しないものがある。COVID19感染拡大の終息後は、被験者を増やすことも考慮に入れ、研究を継続したい。

5. 研究発表

(1) 学会誌等

①成田奈緒子

脳科学にもとづく親子支援プログラム
指導と評価 68(1):39-41, 2022

(2) 口頭発表

①成田奈緒子

子どもたちの発達のカギを握る「正しい睡眠」
小児歯科学会第36回関東地方会大会2021. 10. 17 (Web開催)

②成田奈緒子、田副真美

ペアレンティングトレーニングを用いた長期親子介入支援の事例検討
第39回日本小児心身医学会学術集会2021. 9. 23-25 香川 (オンライン)

(3) 出版物

①山中伸弥、成田奈緒子

山中教授、同級生の小児脳科学者と子育てを語る 200p
2021. 10. 20 講談社 ISBN 978-4-06-525912-2

②高橋弥生・臼井達矢 (編著)

保育内容 健康 192p 中 149-160p
2022. 3. 23 青踏社 ISBN978-4-902636-69-7